

目次

町長・議長新年のあいさつ	3
まちを元気にする出世魚～鯛～	4
人の間に Vol.19 運動の専門家・三宅直美さん	8
12月議会報告	10
平成20年成人者一覧	11
公民館通信 第6号 ～白丸公民館～	12
まちのできごと アエノコト/能登井オープニングイベント/ いしかわ地域づくり表彰 など	14
くらしの掲示板 お知らせ/募集/催し/相談/能登町クイズ 100選 心身障害者扶養共済制度改正 など	16
文化&スポーツ案内・結果	20
図書館・児童館案内 遊々能登～奥能登イベント情報～	21
安心安全まちづくり/国民年金のはなし/入札結果	22
健康インフォメーション	24
有線テレビ番組案内 お正月特別番組案内	26
こせきのまど/寄付/人口動態	27



◀今月の表紙

「能登井」が販売開始された12月1日、宇出津商店街で「能登井オープニングイベント」が開催され、料理の鉄人・道場六三郎氏が来町。寒ぶりの解体を見学し、能登井を試食しました。

謹賀新年



能登町長 持木 一茂

新年明けましておめでとうございます。

昨年は雪も少なく、穏やかな春を迎えるかと思われましたが、3月25日に発生した能登半島地震によってこれまで経験したことのないような強烈な揺れを感じました。程度の差こそあれ、ほとんどの皆様が何らかの被害を受けたこと存じます。夏には記録的な豪雨により橋は流され、街が水に浸かり、道路や農地などに大きな被害を受けるなど、災害について大きく考えさせられた年でした。

さて、各種報道より「地域格差」という言葉がよく聞かれるようになりました。都市部と農漁村部の所得や社会基盤の格差を指す言葉ですが、その要因に「三位一体改革」や地方分権の推進が挙げられます。能登町も国の施策によって大きく針路を転換せざるを得なかったのは事実で、切迫した町財政運営を強いられています。

今後、町民の皆様が希望を持

てるような町であるために、未来を背負って立つ能登町の皆様のために、何としてでも現在の状況を改善し、自立していかなければなりません。事務事業の合理化推進など諸処の政策によって歳出削減に努める一方、町税の収納率向上など歳入の確保を図り、また交流人口の拡大や地産地消による地元経済の活性化、福祉・教育の面においても、引き続き町内に隔たりのない施策を推進していく所存です。

能登町が未来へ向かって歩み続けるためには、町民の皆様一人ひとりの行動が不可欠です。地震後の風評被害の払拭に取り組む皆様、集中豪雨の後、地域として力を合わせ二次災害の警戒に当たる皆様のことを見聞きして、能登町の皆様ならこの町を元気にできると確信しております。

民間企業による能登の自然を生かした産業開発の話もあります。町民と行政が協働すれば、能登町の秘めたる魅力を引き出す余地は十分あるはずです。

本年が、皆様にとりまして健康やかで朗らかな年になることをご祈念申し上げます。新年のごあいさつといたします。



能登町議会議長 新平 悠紀夫

平成20年の輝かしい新春を迎えるにあたり町民の皆様にご挨拶申し上げます。

日ごろより町政に対して温かいご理解と絶大なご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

顧みますと、平成19年は国政では安倍政権の下で8月に実施された参議院選挙において、年金問題や「政治と金」の問題に加えて、格差社会の広がりに対する国民の不満が自民党の敗北となり、参院のねじれ国会となりました。新たに福田内閣が発足しましたが今後の政界の行く末が案じられ、小沢民主党との主導権争いが今年の目玉と思われまます。地方自治体としては、都市と地方の格差解消に向けた対策として「税源や権限の移譲」など地方分権が大きく前進するよう努力されることを期待しております。

一方では、食品や耐震構造などの偽装が次々と発覚し、年金記録不備、防衛省の接待、裏金

など国民に対する偽りも大きく報道されています。また凶悪な殺人事件も毎日のように起きており、一層の心配をしております。今年こそは安心安全な日本であり、能登町でありたいと願うばかりであります。

昨年3月25日午前9時42分ごろに発生した能登半島地震は、能登地方での過去にない甚大な被害となりました。夏には集中豪雨に見舞われ、大変な被害と住民生活や経済活動に重大な影響が発生しました。この経験を生かし、危機管理体制の一層の充実が図られるよう議会としましても努力いたします。

能登町も合併して3年目、町を取り巻く社会情勢は刻々と変化しています。財政面においても一層厳しい状況が続く、責任ある持続可能な町財政運営が不可欠となっております。今こそ将来の町づくりのため、町民・行政・議会が一体となって創意工夫を図り、力を結集していく所存でありますので倍旧のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

終わりにりましたが、町民皆様の益々のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。新年のごあいさつといたします。

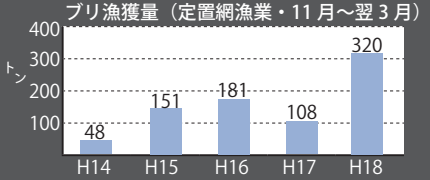
データで 鯿を解体

①ブリの一生を解体

ブリは成長とともに名前が変わります。能登地方ではコソクラ→フクラギ→ガンド→ブリとなります。生後2年以上、体長約70cm以上まで成長したものがブリと呼ばれます。またブリの稚魚は「モジャコ(藻雑魚)」と呼ばれ流れ藻の下で生活します。ブリの養殖はこのモジャコを網ですくって育てられます。

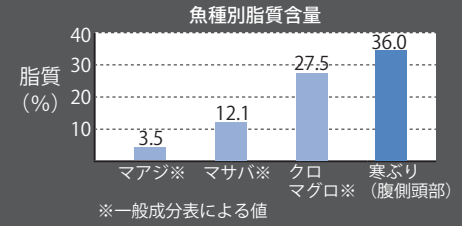
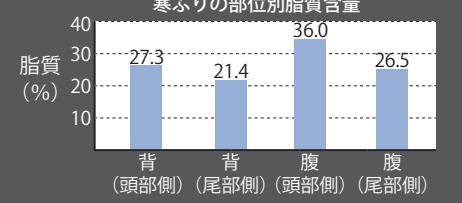
②漁獲量を解体

能登町のブリの漁獲量は48トから320ト(8kg換算で4万本)です。



③ブリの脂を解体

寒ぶりといえば「脂」。その脂分は背より腹、尾部側より頭部側が多く、クロマグロの1.3倍です。



④栄養豊富なブリを買いたい

ブリは栄養満点な食材なのです。

	ブリ(生)	まだい(生)
DHA	1700 mg	610 mg
EPA	940 mg	300 mg
鉄	1.3 mg	0.2 mg
ビタミンD	8.0mcg	5.0mcg
ビタミンB1	0.23 mg	0.09 mg
ビタミンB2	0.36 mg	0.05 mg

mcg = マイクログラム

※参考資料
 ②③石川県水産総合センター提供資料
 ①④Fのさかな(能登カルチャークラブ発行)



寒ぶりまつりのメインイベント「解体・即売」では、ブリを求める人と解体を一目見ようとする人がたくさん集まった。

まちを元気にする出世魚

寒ぶり

町の魚「ブリ」。この時期に水揚げされるブリは、特に脂がのっており「寒ぶり」として重宝されてきました。冬の日本海からの最高の贈り物、「寒ぶり」がこの町を元気にします。

と祝いの魚としても利用されています。石川県や富山県では娘の嫁ぎ先にブリを一匹丸ごと贈り、贈られた側は半分を贈り返し両家で半身ずついただくという風習が残っています。

ブリが町を活性化

魚の美味しいまちづくり実行委員会(商工会内)が毎年開催している「能登の寒ぶりまつり」は寒ぶりを全国にアピールし、能登町を「魚の美味しい町」として発信することを目的としており、今年も12月9日に宇出津商店街で開催されました。

イベントには、刺身用、解体用に宇出津港で水揚げされた65本のブリが用意されました。午前、午後の2回に分けて行われた寒ぶりの解体・即売では、地元魚屋さんの手によって次々とブリがさばかれ、半身単位で

御用ぶりとして献上される

今年も寒ぶりの季節がやってきました。冬の味覚の代表格とされる寒ぶりは、古くからこの地域の人々にとって特別な魚でした。今でも12月の雷鳴は「ブリ起こし」と呼ばれ、荒れた海を避けて富山湾に到来するブリを、たくさんの方が心待ちにしているのです。

文献によると、1491年の史料に「波並の鯿網」と記されていることから、ブリとの歴史は中世までさかのぼることに

出世魚であり祝いの魚

ブリは、その成長とともに名前が変わる出世魚の代表でもあります。そのため「縁起が良い」

ります。藩政時代には、水揚げされた寒ぶりは「御用ぶり」として藩主に献上されてきました。また最大の消費地金沢行きは「金沢登り」、地元で消費されるブリは「地払ぶり」と呼ばれていました。水揚げされたブリはまず御用ぶりが優先されたそう、寒ぶりがどれだけ重宝されたかが伺われます。



1 先着500人に無料で振る舞われた大漁鍋には、地元産の海の幸が盛りだくさん。長い行列ができていた。
 2 会場となった商店街は歩行者天国となった。たくさんの方々が特産品などを販売した。
 3 朝宇出津港で水揚げされたばかりの新鮮な魚介類にもたくさんの方々が飛びついて売れていた。

魚師 ぶり

ブランド化への取り組み



ブランド化を目指して

「この町は漁業で栄えてきた町。ブリのブランド化は漁業再生には欠かせない」と語る石川県漁業協同組合（以下県漁協）能都支所参事の渡誠さん。今年3月、県漁協能都支所はブリのブランド化を目指して特許庁に商標登録を申請し11月16日に登録された。「宇出津港のと寒ぶり」という文字と、背景に網をイメージした図柄として登録された商標について渡さんは「ブリはこの町の宝物。町の活性化のためにも『宇出津港』という文字を入れたかった」と申請の経緯を振り返る。

氷見に追いつきたい

「宇出津港のと寒ぶり」とは、定置網漁業で漁獲され、12月から1月の2カ月間にかけて宇出津港に水揚げされた重さ10kg以

宇出津港で水揚げされる寒ぶりが今年11月に商標登録された。
ブランド化に取り組む県漁協能都支所にその目的や課題を聞いた。

出ます。ブランド化を進めることで能登のブリの価格を氷見に負けないほどに引き上げたい。今はそのスタートラインに立つばかりです。

できることからやってみよう

ブリのブランド化への気運は3年前から高まり、青いタグや専用箱の取り組みは行政の補助を受けて以前から実施されてきたと話す渡さんは、今回の「

希少価値が高い寒ぶり

能都支所全体の水揚げに対するブリの割合は大きい。例年では12月1カ月間の水揚げ高が1年間の約30%で、そのうちの95%をブリが占めている。額にするとうち2億5千万から3億円ということだ。しかし今年度は12月中旬までブリ大漁の話が聞かえてこない。渡さんによると「毎年ブリのピークは12月20日ごろ

宇出津港のと寒ぶり



商標登録証

商標とは...

商品やサービスの出所を需要者に伝達するための標識のこと。出願、審査を経て特許庁の原簿に登録されることを「商標登録」という。商標を使用しながら一定の質の商品やサービスを提供することで、その商標に業務上の信用（ブランド）として財産的価値が備わるとされている。

登録について「商標登録すればブランドとしてすぐに価格が上がるわけではない。ブランドは長期的な取り組みによって、あとからついてくるものです。今後は町の案内板などにブリを使うなど、行政と一緒にできることからやっていきたい。また近年増えているマスコミ取材を生かして、全国にアピールしたいと考えています」と語る。

だったが、今年中は層域の水温が高いためかブリの回遊が遅れていると考えられています」とのことだ。
養殖ではない天然のブリには豊漁不漁があり、常に一定量を出荷できるわけではない。「自然や魚に優しい定置網、この時期だけの水揚げ、そして数にも限りがあることが希少価値につながる」と渡さんは考えている。



石川県漁業協同組合能都支所
渡誠 参事 (57歳)
わたり・まこと

